

今回の人生はメイドらしい

登場人物 紹介

エレオノーレ

豊富な身体つきをした
謎の美女。アリーシアの持つ
知識を狙っている。

エドヴァルト

どこか陰のある青年。
エレオノーレの命令に
従って動いている。

レヴェリツジ

真面目で有能な執事。
全ての使用人の長であり、
アリーシアにとっては
上司に当たる。

アバーユ

城の騎士。式典で
大役を任されたことで、
アリーシアに
相談を持ちかける。

サハル

城のシェフ。仕事の面では
非常に厳しいが、アリーシアを
何かと助けてくれる
頼もしい存在。

アンバー

ハウスマイド。
アリーシアと同じ
大部屋で暮らしている。
優しくて友だち思い。

ユリウス

ローゼンベルグ王国の
第三王子。泣きボクロが色っぽい
美男子で、庭いじりが趣味。
何やらワケありらしく、
王都から離れて暮らしている。

アリーシア

王子の城のスカラリーメイド。
数十回にも及ぶ辛い転生を
繰り返してきた。より良い来世or
天国行きを目指し、豊富な知識を
生かして善行に励む。

1 蘇^{よみがえ}る過去の記憶

人生は一度限り。悔いなく生きよ。

……なんて、誰が言ったのだろう。

私は先日、何度目になるのかさえわからない人生を歩み始めた……いや、歩み始めたと言っては語弊^{ごへい}がある。気が付いたときには、すでに歩んでいた、と言うのが正しい。

——【転生者^{てんせいしゃ}】。

こんな言葉を聞いたことはあるだろうか？

◇ ◇ ◇

「いっただつきまーす」

神さまへの祈りもそこそこに、私はテーブルの上の黒パンへ手を伸ばした。それを物言いたげに見つめるのは、兄のラウルである。

「兄さん、何？」

私はそう言いながら黒パンを手で小さくちぎり、塩で味付けされた野菜スープに浸す。こうすると、硬くて味気ないパンがふやけて食べやすくなるのだ。

「エマ……お前は待つということができないのか？ まだ全員が席についてないだろう」

「まあまあ、あなた。良いじゃないの」

呆れた様子の兄を宥めるのは、兄嫁のレジーヌだ。兄との間に生まれたばかりの娘、ディーナがいる。

私はレジーヌと同じ二十三歳だというのに、『未婚』『実家暮らし』『仕事なし』。……考えれば考えるほど、えらい違いだ。更に言うと、この国——ローゼンベルグにおける女性の結婚適齢期は十六歳から二十歳。私は世間では完全に売れ残り扱いだった。

ただ一つ言い訳をしておくならば、私は決して不器量ではない。母譲りの金髪は緩く波打ち、父譲りの青い瞳はぱっちりとした猫目。鼻は少しツンと尖っていて生意気そうだと言われるものの、そんなに悪くないはずだ。

もちろんこれまでにお付き合いした人はいるし、結婚を申し込まれたこともある。でも私は居心地のいいこの家が大好きで、ずっとここで暮らしたい……なんて考えているのだ。

私のことを庇ってくれたレジーヌにありがとうがどうの意味を込めて目配せすると、彼女は柔らかな微笑んでくれた。まったく口うるさい愚兄にはもったいないお嫁さんだ。

「レジーヌはエマに甘すぎるな。俺の妹だからって、そんなに気を遣わなくていいんだぞ？」

兄はレジーヌが私の肩を持ったのが不満らしく、まだぐちぐちと言っている。

「そんなことないわ。だってエマったら私のお腹が大きいとき、『そんな重い物は持つちゃ駄目よ』と言って、畑仕事を全部代わってくれたのよ？ むしろエマが私に甘すぎると思うわ」

「そ、そうか……」
これには兄もたじたじになる。笑顔できっぱり言い切ったレジーヌは輝いて見えた。決して私を褒めてくれたからではない。

そんなやり取りをしているうちに父がやってきて、家族全員で夕食のテーブルを囲む。

父と母と兄と兄嫁、そして姪と私の六人家族。とはいえ、生まれたばかりの姪はさすがにテーブルにはつかず、ベビーベッドでスヤスヤと寝息を立てているが。

父に続いて皆で神さまに祈りを捧げたあと、一斉に食事に手を伸ばした。

今日の夕食は、黒パンと野菜のスープ。日替わりでスープが塩味になったり、トマト味になったり、牛の乳を入れたシチューになったりするものの、基本はいつも同じ。特別な日でもない限り、毎日こんなメニューだ。

だが毎日同じと言っても悔ることなかれ。農家である我が家のスープには、ふんだんに使われた野菜の旨味が溶け出していて、とても美味しい。これをマズイなんて言う者は、野菜嫌いのお子ちゃまか、家庭料理の味を知らない貴族か、味オンチに違いない。

その自慢のスープに、ちぎったパンの先だけ浸す者もいれば、完全に沈めてしまう者もいる。私はどちらかといえば後者で、パンからスープが滴るほどつけて食べるのが好きだ。

スープをたっぷりと含んでホワンと膨らんだパンを、スプーンで口に運ぶ。柔らかくなったパン

を噛むたびに、スープがジュワツとしみ出して口いっぱい広がる。まさに至福の時間だ。思わず綻ほころぶ口元からスープが零こぼれないよう気を付けながら、二切れ目のパンを口に運ぶ。

だがパンを噛んだ瞬間、雷に打たれたかのごとき衝撃に見舞われた。

「っげほっ！ げほっ！」

「……まったく、そそっかしい奴だな」

兄が眉を顰ひそめて文句を言いつつ、テーブルの上に置いてあったクロスを渡してくれる。が、私はそれどころではなかった。

自分の意思とは無関係に頭の中に流れ込んでくる“記憶”。

しかし、それはまったく身に覚えのないものばかりだった。見たこともない景色が次々と浮かんで消えていく。

膨大な量の情報を脳が処理しきれず、ひどい頭痛に襲われる。とっさに両手で頭を抱え込むが、そんなことで和らやわぐような生易なまやしい痛みではなかった。

握りしめていたスプーンを落としてしまったのだろう。硬い物がお皿にぶつかる甲高い音かんだかが聞こえたのを最後に、私は意識を手放した。

意識を取り戻し、ゆっくりと目を開ける。焦点が合わないまま何度も瞬まばたきする私の顔を、見知らぬ人たちが覗のぞき込んでいた。

「エマ……だ、大丈夫？」

「どうしたんだ？ どこか痛むのか？」

ああ、全てを思い出した。

——私は【転生者】、アリーシア・オルフェ。天国の門かに弾はじかれた罪人だ。

「エマ……？」

目の前に座る男性が、困惑した様子で呟つぶいた。

……エマ？

そうだ。私の名前だ。今回の——

私は【転生者】という言葉が示す通り、一つの生を終えるたびに次の生を与えられている。

それだけを聞けば神さまに愛されていると思われるかもしれないが、おそらく逆だ。

——私は、神さまに嫌われている。

そのため、人生の記憶をリセットされることなく、転生を繰り返している。辛い記憶を持ったままでは、魂の安寧あんねいなどありえない。愛した者たちと死に別れた記憶を抱え、一人孤独に生き続けるのだ。

なぜそこまで神さまに嫌われたのか？ その理由もはっきりとはわからない。

だが、大体の予想はつく——

今から千年以上前に、私——アリーシア・オルフェは生まれた。グラシア皇国という国の侯爵家の姫として、何不自由なく育てられたのだ。

家柄だけでなく容姿にも恵まれ、私は人生を謳歌した。その当時は気にも留めなかったが、実に傲慢で嫌な女だった。

私の髪を梳いていた侍女が、クシを少し引っかけたくらいで彼女の髪を丸刈りにしたり、私のドレスに飲み物を零したメイドを、鞭打ちにしたりした。彼女が飲み物を零したのは、私がぶつかったせいだというのに……

でも貴族とは往々にしてそういうものであり、私だけが特別悪人だったわけではない。お父さまもお母さまも私のすることを止めはしなかったし、彼らが同じようなことをするのを見て育った。私と他の貴族との決定的な違い、それは一人の神官を破滅に追いやったことだろう。

その神官は若く、とても美しかった。一目で神さまから愛されているとわかるほどに。髪は金色に光り輝き、瞳は澄み切った空よりも青かった。彼が祭壇の前で跪き、一心に祈りを捧げる声は、信徒たちの心を癒していた。

——そんな彼に、私は生まれて初めて恋をしたのだ。

騙して屋敷に連れ込み、下着姿でベッドに誘った。だが、彼は私の誘いに乗らなかった。

私は思い通りにならない彼に怒り、「両親に『彼に襲われた』と嘘をついた。これで彼は責任を取り、私と結婚せざるを得ないだろう……そう考えたのだ。

だが結果として罪のない神官は教会を破門され、失意のうちに流行り病で亡くなった。きっと私このことを恨みながら息絶えたことだろう。

……しかし当時のグラシア皇国では、教会から免罪符を購入すればどんな罪も許され、死後は天

国に行けるとされていた。当然、私もそう信じて疑わなかった。

だが、私は許されなかった。永遠なる安息の地へ、迎え入れてもらえなかったのだ。

不治の病に冒されたとき、私は三十代という若さだった。まだまだ人生を謳歌したかった、そんな悔いを残したまま眠るように息を引き取った。

けれど次の瞬間、私は焔で熱い日射しを浴びながら、鋏を振りかぶっていた。

いや、実際には農民に転生して畑仕事をしているときに、アリーシアの記憶を思い出したのだ。いつも【転生者】としての記憶は唐突に蘇る。

このときは転生したという事実どころか、自分が持っている道具の名前すらわからず、ひどく混乱したものだ。転生先の家族にも随分と迷惑をかけてしまった。

「何よこの汚い家は！ ペットの犬の方がまだマシな部屋に住んでいてよ！」

「人攫い！ わたくしをこんな目に遭わせて、ただで済むとでもお思い？」

「わたくしに触らないで！ 早く家に帰しなさい！」

日々の農作業で真っ黒に焼けた私は、色あせた木綿のワンピースを身に纏い、貴族のように振る舞いながら喚いた。今でも当時の家族たちの、啞然とした表情を忘れられない。

農民の娘として生まれ育ったことを徐々に思い出してからも、これは悪い夢だと信じて疑わなかった。

だが同じようなことを二度三度と繰り返すうちに、自分が【転生者】であることを認めざるを得なくなっていくのだ。

それ以降の転生先は実にバラエティに富んでいたが、私は読み書きを含め、言葉に不自由することとはなかった。実に不思議だが、神さまからのせめてもの慈悲かもしれない。

転生が五回を過ぎたあたりから、人を傷つける言葉をグツと呑み込む術を覚え、転生が十回を過ぎた頃には、できるだけ周りの人にショックを与えないように振る舞っていた。アリーシア時代からすると、大した進歩だ。

とはいえ、その程度で罪が許されるはずもなく、それから先、数十……下手をすれば三桁に及ぶ転生を繰り返してきた。そして必ず、私が昔嘲り虐げていた者たち——使用人や庶民として生まれできたのだ。

いや、ときには動物や虫に転生することもあったが、いずれにせよ、アリーシアのような特権階級に生まれたことは一度としてない。

きつと神さまは、まだ私の罪を許されていないのだろう。そしてこの転生がいつまで続くかわからないまま、私は一人で現世を彷徨い続けるに違いない。

そして今回新たに用意された人生が、この身体の持ち主というわけだ。

——エマ・ブラウン、二十三歳。ローゼンベルグという国の辺境にある村、サウスダート生まれ。独身、無職。

私はエマの記憶を整理しながら、今回の転生先の家族を見回した。

私の隣に座る金髪の女性が母親で、その横に座る青い瞳の男性が父親。私の向かいに座る、父によく似た青年は兄で、彼の横に座る赤毛の女性が兄嫁だろう。エマの記憶によれば、他に生まれたばかりの姪、つ子もいるはず……
ずっと黙ったままの私を家族たちが怪訝そうに見つめているのに気が付き、私は慌てて笑顔を作る。

「だ、大丈夫。急に頭が痛くなっちゃって……ごめんね、びっくりさせた？」

まさか『転生者』としての記憶を思い出して……』などとは言えないため、笑って誤魔化す。最初に反応したのは、父だった。

「本当に大丈夫なのか？」

「ええ。何ともないわ」

あっけらかんと答える私を見て、父は安堵の表情を浮かべた。だが、母はまだ心配そうにしている。

「でも、すごく苦しうだったわよ？ お医者さまを呼んだ方が……」

「大げさよ。本当に平気だから、心配しないで。ね？」

医者と呼ばれて困ることは何もないが、この世界では診察代や薬代が非常に高額なので、滅多なことでは医者の世話にならないと記憶している。

「じゃあせめて、横になった方がいいんじゃない？」

私はその母の言葉に甘えることにした。情報を整理する時間が必要だったからだ。エマの記憶を探りながらの会話は神経を使う。

「そうね……そうする。お休みなさい」

未だ心配そうな母に笑顔を向けてから、記憶にあるエマの部屋へと向かう。二階の端にあるその部屋に入り静かにドアを閉めたあと、室内をざっと見回した。

シンプルな木製のベッドとチェスト。それらの上には手作りのぬいぐるみが置いてある。リネン類やカーテンはピンク系で統一され、二十三歳の女性の部屋にしては少し子供っぽい。とはいえ私はこれらを見慣れているはずなのだが、妙に落ち着かない気分になる。

前世の記憶を取り戻した日はいつもこうだ。自分であって自分でない者が生活してきた空間は、どうにも居心地が悪い。

そんな気分を払拭はら拭するため、部屋の隅すみにある本棚に手を伸ばすが、子供向けの絵本が数冊入っているだけだった。エマはあまり読書には興味がなかったことを思い出す。

ベッドの脇に目を移すと、作りかけのレース編みが籠かごに入れられていた。

私はエマの記憶を探る。

「……ああ、そうだ……本当は生まれてくるディーナのために、帽子とおくるみを作ろうとしてたのよね。でも結局間に合わなくて、レジーヌの誕生日祝いに贈るショールに編み直してるんだっけ」

確かレジーヌの誕生日は来月の予定だ。

「おっちょこちょいで、ドジで……でも気さくでいつも明るくて。そんな娘むすめだったわね、エマ」
私は自分の胸に手を当てて呟つぶやいた。

——エマはもういない。

エマ・ブラウンは消えて、アリーシア・オルフェになったのだ。

【転生者】であることを思い出してしまった以上、私はアリーシアとしてしか生きていけない。エマの記憶はもちろん受け継ぐが、他のたくさんの人生の記憶と同様に、アリーシアの一部となってしまう。

ベッドに腰掛け、母の手作りのベッドカバーをそっと撫でる。丁寧な刺繍ししゅうが施ほどこされたカバーは、母の愛に溢れていた。

「平凡だけど、愛に満ちた家庭。エマは幸せな人生を歩んでいたのね」

誰に言うでもなく、そう呟く。

「今回の人生はかなり良い方だわ……またあそこ、そこに転生するのだけは、絶対に嫌……」

私は一つ前の前世での辛い生活を思い出して、ぶるりと身を震わせた。あそこでの暮らしを思い出さずだけで、恐怖を覚える。

——奴隷だったのだ。

それも魔王さまの奴隷。比喩ひよではなく、頭に二本の角が生えた真正正銘の魔王。

人間なんて虫ケラ……いや、石ころ程度にしか思っていない、冷酷無比で残酷な王さまの城。そこでの生活は実に辛く苦しいもので、早く死んでしまいたいと何度も思った。

「ようやく……ようやく終わったのね!!」

歓喜のまま歌って踊り出したところだが、階下の家族をこれ以上心配させるわけにはいかない。

だからグツとこらえ、小さくガツポーズをするにとどめた。

「それに比べて、今回は本当に普通の世界……それも私が生まれた世界によく似ているわ」

ここは魔法も魔族も存在しない、人間だけの世界だ。けれどロシア皇国と同じく、王族や貴族といった特権階級が存在している。

「こういった世界は久しぶりね……」

やはり生まれ故郷に似た世界は落ち着く。

というのも、最近はずっと変な世界にばかり転生していたからだ。

——魔族や魔法の存在する世界、精霊界、おとぎ話の世界……

中でも地球という星に転生したときは、本当に驚いた。

だって鉄の塊かたまりが空を飛ぶなんて、信じられる？ 馬の代わりに鉄の箱が人々を乗せて、我が物顔で街中を走っている世界を想像できる？ 無理でしょう？

その世界でアリーシアの記憶を取り戻したとき、私は日本という小さな島国の『女子高生』だった。同世代の若者たちと揃いの制服そろいを着て学校へ通い、勉強することが仕事という不思議な身分だ。初めこそ戸惑ったものの、ひと月もする頃にはケータイなる魔法の箱を使いこなし、友人から送られてくる暗号文も解読できるまでになった。

他には……ああ、そうだ。絵本の世界に転生したこともある。

『虹色の水』という、私の故国ロシア皇国で読まれていた絵本だ。

幸せをもたらす虹色の水を手に入れるため、一人の若者が旅に出る。心根が優しく勇氣ある若者

は数々の困難を乗り越え、虹色の水を手に入れる。そして旅の途中で出会った美しい少女と結婚して幸せに暮らすという、ありふれた内容の物語である。

私は主人公の若者や彼と結ばれる少女ではなく、若者が暮らす街の住人Cだった。

それを自覚したとき、気付いたのだ。私は絶対に特権階級には転生できず、物語の世界でも主人公には決してなれないということに。少なくとも、私の罪が許されるまでは……

しかし、その【庶民や脇役に転生する】という決まり事と【ある法則】を除けば、転生先は何でもありだ。

世界も時間軸もバラバラ、もちろん性別が男になったことだって何度もある。

さすがにアリーシアとしての自我を取り戻してからは、女性に恋することはできなかったのだ。そういう場合は生涯独身を貫いた。女性に転生した場合は結婚したこともあるが、子供を産んだことは一度もない。

ともかく男女を問わず、人間に転生したときは幸運な方だ。

鹿にウサギ、コオロギやバッタ、セミに転生したこともある。一週間鳴いて暮らしたものだ……ミンミンと。

こうやって思い返してみると、日本に転生したときの人生は、とても幸せなものだった。命の危険が少ない国、満たされる知識欲、美味しい食事、便利な道具……

あれをベストとするのなら、ワーストはぶつちぎりであそこだ……魔王城。これに関しては、もう詳しい説明は必要ないだろう。

そして先ほど言った【ある法則】というのが、日本や魔王城への転生と深く関わっている。

——善行をすれば次の転生先は少しましになり、逆に悪行をすればとても厳しくなるのだ。

日本に転生する一つ前の人生で、私は馬車に轢かれそうになっていた猫を助けようとして、はねられて死んだ。

ひどく間抜けな話なのだが、どうやら神さまの評価は高かったらしい。

逆に前回、魔王城に転生してしまったのは、その一つ前の人生でリングゴを万引きしたためだと思われる。追いかけてきた店主から逃げる際、通行人を突き飛ばしたことも悪かったに違いない。

確かに悪いことだが、魔王城で奴隷をさせられるほどだろうか？ 自分を正当化するつもりはなけれど、そのときはお金がなくて二日間何も食べておらず、ひどく飢えていたというのに……

そういえば道に落ちていた銀貨をネコババしたときも、次の人生でエライ目に遭ったなあ……と思いつく。

今でこそ、こうして過去を冷静に振り返る余裕があるものの、自分が【転生者】であると認めるまでには、長い時間を必要とした。

贅沢な生活というのはなかなか忘れられないもの。侯爵令嬢としての記憶は、長い間私を苦しめた。自分が庶民や脇役であることが屈辱で、私にこんな仕打ちをする神さまを呪った。

しかし、長い転生生活で色々な人と触れ合ううちに、神さまではなくかつての自分の愚かさを呪うようになった。

とはいえ、なぜ私だけがこんな風に転生を繰り返すのかはわからない。

それとも誰もが口にしなだけで、世界は私のような【転生者】で溢れているのだろうか？

いくら考えても答えは出ない。

ただ私は与えられた生を必死に生きるだけ。

いつか神さまに許され、天国の門が開かれる日を夢見て……これまでも、そしてこれからも。

私はベッドに身を横たえ、そっと目を閉じた。



「エマ！ 聞いているの？」

物思いに耽つていた私は、母の声で現実を引き戻された。

あれから十日。私の手には一切れの黒パン。どうやらパンを持ったまま固まっていたらしい。一緒に食卓を囲んでいる家族が、心配そうに私を見つめていた。

母が何かを決心したようにスプーンを置き、静かに口を開く。

「……エマ、あなた最近変よ？ 口から生まれてきたに違いないって言われるほど、お喋りが大好きなあなたが黙り込んで……何か悩みでもあるの？」

「確かに変だな。この間だって俺や父さんの本棚を漁って、何冊もの本を読み耽っていたし……俺は一瞬、夢を見てるのかと思っただくらいだ」

兄がそう言って母に同調すると、父までもが頷いた。

「エマ、私たちは家族だろう？ 打ち明けてごらん」
真剣な眼差しを向けられ、私は困った。

悩みなんてないのだ。数日前に、自分が【転生者】であることを思い出しただけ。ただ、それに伴いエマ・ブラウンはいなくなつた。お喋りでお転婆で朗らかな彼女ではなく、何度も人生を経験しているため妙に知恵が回つて、物事にあまり動じない私——アリーシア・オルフエとなつたのだ。

それを正直に話せば、母たちは悲しみ、そして最終的には私のことを憎むだろう。

なぜなら彼らにとつての家族はエマ・ブラウンであり、私は言わば彼女の身体を乗っ取つた別人にすぎないからだ。

「別に、悩みなんて……」

私はそう誤魔化すしかできなかつた。

しかしそんな返事で家族が納得するはずもなく、私が悩みを打ち明けるのを辛抱強く待っている。私は少し迷つたものの、記憶が戻つたときから立てていた計画を早めに実行することにした。

「やっぱり家族に隠し事はできないね。実は私……家を出ようと思つた」

突然の独り立ち宣言に、皆は言葉も出ないほど驚いている。やがて驚きからいち早く立ち直つた母が、目に涙をためながら聞いてきた。

「どうして!? そんなの無茶よ……私のお使いでさえ三回のうち二回は間違えるあなたが、一人で暮らすだなんて……」

テーブルの上で小刻みに震える母の手を、父が慰めるように握り、低い声で尋ねてくる。

「なぜだ……理由は？」

家を出る理由は二つ。

一つ目は、家族を悲しませたくないから。こんな短期間で私の様子がおかしいと気付く彼らだ。

このまま一緒に暮らしていたら、いずれ私の秘密を告白せざるを得なくなる。そうなれば、彼らはひどく悲しむに違いない。

二つ目は、善行を積まなければならないからだ。

良いことをすれば来世がより良いものになるという法則があるくらいだから、善行を積んでいれば、いずれは罪を許され天国へ行けるかもしれない。

この家で両親に甘えっぱなしの怠惰な生活が続けていては、それは望めない。それに働こうにも、こんな田舎では働き口なんてないから、都会に出なければ。

だが本当のことは言えないので、私は用意していた答えを口にする。

「ディーナも生まれたことだし、いつまでも母さんたちに甘えていられないと思って。あの小さなお姫さまに、自分の部屋をあげないと駄目でしょ？」

二週間ほど前に生まれたばかりの姪を引き合に出すと、今度はレジーヌが慌てたように言う。

「そんな！ まだ私たちと一緒にの部屋で十分よ、ねえ」

レジーヌは同意を求め、隣に座る兄を見上げた。

「レジーヌの言う通りだ。確かにディーナにも部屋は必要だが、まだ早い。その頃には、さすがの

お前も嫁に行っているだろうし、今家を出る必要はないと思うぞ？」

「でも、私ももうこんな年だしさ、結婚できなかつたときのために、手に職をつけとかないと」

結婚適齢期は過ぎているし、都会に出たとしても、まともな仕事にありつくためには手に職が若さ、そのどちらかが必要となる。

私に残された時間は長くない。

「なるほどな……しかし悩みなんてなさそうに見えるお前が、そんなことを考えていたとは気が付かなかつたよ」

兄は苦笑しつつも理解してくれた。あとは両親の説得だ。

「お父さん、お母さん……お願い、わかつて」

そう懇願すると、父はゆつくりと頷いた。

「……お前がそこまで言うのなら仕方ないな。できる限りの応援はしてやる。具体的な計画はあるのか？ 話してみる」

父に促され、ある街で働きながら生活するつもりだと告げた。街の名を聞いた父は、元より渋かつた顔を更に渋くする。

「ケールベルグ領か……遠いな……」

父がそう言うのも無理はない。間違つても家族がふらりと会いに来ないよう、この町のすぐ隣にある地方都市ではなく、あえて遠くの領地にある大都市を選んだのだ。

「でも、それくらい大きな街じゃないと、仕事にありつけないだろうし……」

言い訳っぽく聞こえるだろう私の台詞に、ありがたいことに兄が頷いてくれた。

「確かにエマの言う通りかもしれないな。隣町は失業者が多くて治安も悪くなっているって耳にするし」

その兄の言葉を聞いて、ようやく父は諦めたように大きく息を吐き出した。

「わかつた。で、いつ家を出るつもりなんだ？」

「ひと月以内には——」

私の言葉を遮り、母が悲鳴にも似た声を上げる。

「そんなに急がなくてもいいじゃない！」

とうとう母は泣き崩れてしまった。私はとっさにその身体を抱きしめようとす。

だがもはやエマではない私に、母を慰める資格があるのだろうか……そう思つて、伸ばしかけた手を止めた。

それでも目の前で泣き続ける母を放つておくことはできず、肩にそうと手をのせる。その細い肩は震えていて、胸が痛んだ。

私は幾度となく、愛する人との別れを経験した。天国で再会することも叶わず、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて……

愛するからこんなにも苦しいのだ。忘れられないから悲しいのだ。

あるときそれに気付いた私は、人を心から愛することをやめた。そうならないよう、人と深く関わることを避けるようになったのだ。

でもエマの母親は、すでに私の心に入り込んでしまっていた。

アリーシアの自我が目覚めてからたったの数日間ではあるが、母親らしい愛情を注いでくれた。毎日『体調はどう？ 無理はしないでね』と尋ねてくれたし、庭で取れた果物を『これすごく美味しいわよ。好きでしょう？』と言って手渡してくれた。

そんな彼女を好きになるなどという方が無理だった。

私だって……できることなら、ずっとこの家で暮らしていたい

でもそうすれば、いずれ私の変化に気が付き、嘆き悲しむのは家族たちなのだ。

私は腹にぐっと力を入れて告げる。

「お母さん、長く時間をかけるほどに、決心が鈍ってしまうと思うの。そうなれば余計に別れが辛くなるわ。わかってちょうだい」

父は椅子から立ち上がって母の傍に立ち、そっとその頭を抱く。

「母さん、エマなりによく考えた結果なんだろう。それにエマも、もういい大人だ。その意思を尊重してやるうじやないか」

「……そうね、いつまでも小さな子供じゃないものね。私もエマの歳には、もうとっくに実家を出てこの家に嫁いでいたし、ラウルとエマを産んでいましたものね」

そう言って、母は嫺やかに笑ってみせた。

それを見た父は、家長らしく厳かな声で私に言う。

「お前の気持ちはよくわかった。私たちも旅立ちの準備を手伝おう」



あれからひと月半。私は予定通りケールベルグ領にやって来た。

街をぐるりと取り囲む高い壁。その東西と南に設けられている大門の一つをくぐると、村とは違う洗練された街並みが目に飛び込んできた。

「想像していたよりもずっと大きいし、すごく綺麗な街ね」

いかにも防衛のために作られたといった感じの、堅牢だが味気ない壁に囲まれているので、外から見たときはわからなかった。

領主の城が北の丘にでーんと建っていて、その下には大きなお屋敷が点在している。

そのエリアは言うに及ばず、一般庶民の住居と思しき白い石造りの建物が隙間なく立ち並ぶ様でさえ、辺境の村から出てきた私には庄巻の光景である。

……といっても前回の人生で暮らしていた魔王城は、それこそこの街の数十倍の規模だったけれど。

「さてと！ 街並みを堪能するのはこれくらいにして、まずは家と仕事を探さなきゃね」

こういった大きな街には中央広場があり、あらゆる情報を記した『掲示板』が設置されている場合が多いため、私は革製の旅行カバンを手に中心地へ向かう。幸い中央広場も掲示板も、すぐに見つけることができた。

貼り出されている情報の量は、大きな街だけあつてとても多い。求人情報もかなりの数があるよ
うだ。

「あつた、あつた。ええと……どれにするか迷うわね……」

そう呟きつつ求人情報を物色し始めたのだが、何しろ前世が奴隷だったため、給金をもらえると
いうだけでいい待遇だと感じて目移りしてしまう。困ったものだ。

だが、やがて一枚の求人票が目にとまり、私は驚きの声を上げた。

「嘘！ こんな条件の良い仕事、まだ誰にも取られてないなんて！」

私は迷うことなく、その紙を一気に剥がす。

手にした紙をもう一度じっくりと眺めてみたが、見間違いではないようだ。

——スカラリーメイド募集。女性限定・年齢二十五歳まで。ケールベルグ城での住み込みの仕事
となります。制服貸与。食事付き。勤務時間は早朝から深夜に及びます。体力のある方、すぐに働
ける方を歓迎——

スカラリーメイドとは、主に皿洗いなどの水仕事を任される最下級の使用人だ。だが今の私には、
仕事の内容なんかどうでもいい。

「衣食住がついてくるなんて素敵……よし！ これに決めた!!」

そうして私は大きな革のカバンを手に、意気揚々とケールベルグ城へ向かうのであった。

2 踏み出した一歩

「……オルフェ邸よりもずっと大きい」

最初の人生で暮らしていたオルフェ邸も、侯爵家だけあつてかなり大きな屋敷だった。けれど、
ことは比べものにならない。正門に立っていた衛士から裏口へ回れと言われて城の庭を歩いてい
るものの、一向にたどりつかないのだ。

不安になった私は、すれ違ったメイドに声をかける。

「すみません、裏口ってこちでいいんですよね？」

「そうだけど……あなた新しいメイド？」

「いえ、メイド募集の貼り紙を見て、面接を受けに来たんです」

「あら、そうなの。大きなカバンを持つてるから、てっきり今日からここに住むのかと思ったわ」

彼女はカバンを指差して笑った。

「これ……そんなに目立ちます？」

「そうね。今から面接でしょ？ それはどこかに置いといた方が賢明ね」

そう教えてくれた彼女と別れたあと、私はカバンの隠し場所を探し始めた。

数分歩いた先にラズベリーの茂みを見つけ、そこにカバンを隠すことにする。

以前木こりに転生したことがあるので知っている。ラズベリーの木には棘があるのだ。人さまの全財産を狙うような悪党は、この棘で怪我をするがいい！

誰かに見られたら引かれそうな黒い笑みを浮かべながら、私はせつせとカバンを隠す。もちろん取り出すときのことを考えて、蔦を持ち手に巻きつけておくのも忘れない。

幸いこの怪しい動きを人に見られることなく隠し終えることができた。私は満足げに笑うと、身体に付いた土や草を払う。そして再び裏口へ向かって歩き出すのだった。

「あなたの名前は？」

ニコリともせずそう尋ねてきたのは、大きなデスクを挟んで向かいに座る神経質そうな男性だ。この城の執事であるという彼は、レヴェリッジと名乗った。

「今、私は城の地下にある一室で面接を受けている。」

レヴェリッジさんは胸ポケットから銀色の眼鏡を出してかけると、白い手袋をはめた手で書類の束をパラパラと捲る。

「アリーシア・オルフェと申します」

私はできる限り感じ良く答えた。

サウズダートを出たとき、エマ・ブラウンの名は捨てた。これからはアリーシアという名前で生きていく。

本名でないことは調べればわかってしまうが、たかがスカラーメイドを一人雇うために、わざ

わざと素性を調べたりはしないだろう。

とはいえ、偽るのは名前だけと決めている。それ以外は全て事実を告げるつもりだ。

「紹介状は、ないようですね」

「はい。ずっと家で母の手伝いをしていたのですが、先日兄夫婦の間に姪が生まれたのをきっかけに独り立ちしようと、サウズダートから出てきたばかりなんです」

実はメイドの仕事に就くのに、紹介状がないのはとても不利なのだ。紹介状を持たないメイドというものは、その多くが何らかの問題を起こして解雇されたため、前の雇い主に紹介状を書いてもらえなかった者たち——つまり問題児なのである。

これまでの転生経験の中で、メイドの職に就いたのも一度や二度ではないから、そのあたりの事情には詳しい。

だから問題児だと思われたくなくて、私は聞かれてもいない理由を話したのだった。

「では、メイドの仕事は初めてということですか？」

疑うような視線を向けられたものの、一応は信じてもらえたらしい。

「はい。ですが、生家では一通りの家事をこなしていましたし、農家でしたから体力にも自信があります！」

「わかりました。結果は追って連絡します。滞在先は——？」

「あー……実は先ほどこの街に着いたばかりでして……よければおすすめの宿など教えていただけませんか？」

正直に話すと、レヴェリッジさんは驚いたような表情を浮かべてから、微かに笑った。

「利用したことはないですが、街の大通り沿いにあるグート亭という宿は、良心的な値段で食事も美味しいと聞いたことがあります」

「じゃあ、そこが空いていればお世話になろうと思います」

「わかりました。ではそちらに結果を伝えますので、もし部屋が取れなかった場合でも、宿にその確認だけはしに行ってください」

「はい」

私の返事を聞いたレヴェリッジさんは、これで面接は終わりだとばかりに、書類を手帳に挟んでパタンと閉じた。

このスマートな動き、デキる人っぽいな……などと思いつつと見つめていた私は、レヴェリッジさんの咳払いで我に返り、慌ててお辞儀をして部屋から出るのだった。



「おかしいなあ、確かこの辺だったと思うんだけど……」

カバンを隠したラズベリーの茂みを探しながら、庭を彷徨う。

「あ！ あった！」

ようやく見つけた茂みの傍にしゃがみ込み、カバンに巻きつけておいた藁を探した。それはすぐ

に見つかったので、両手でズルズルと引っ張り出す。

だが途中で何かに引っかかったらしく、動かなくなってしまった。

「嘘……」

諦めずに角度を変えて引っ張るも、びくともしない。

「これはもう、覚悟を決めるしかないかも……」

「何の覚悟を決めるんだい？」

突然背後から声をかけられ、驚いて振り返る。そこにはシンプルな白いシャツを肘まで捲り上げた男性がいて、私を面白そうに見つめていた。

「……私に何かご用でしょうか？」

「用っていうか……」

男性はそう言って、クスリと笑う。

「花の様子を見に来たら、何やらしゃがみ込んでごそごそしている君を見つけたから、声をかけただけだけど？」

片手を腰に当てて首を傾げながら、私を見下ろす男性。花の様子を見に来たということは、きっと庭師だろう。

気まづくなった私は、思いつきり目を逸らした。

「泥棒……じゃないよね？」

「違います！」

私は慌てて否定した。万が一このことがレヴェリッジさんの耳に入ったら、間違いなく不採用になる。

そこで男性とバッチリ目が合ってしまった。

あ……この人、よく見るとすごく格好いい。

少し癖のある髪は夕陽のように赤く、瞳は深い緑色をしていた。右目の下に、小さな泣きボクロがある。

「そう……じゃあ、ここで何をしてたか教えてくれるね？」

庭師の男性は『逃がさないよ？』とばかりに、にっこりと笑ってみせる。私は誤魔化すことは諦め、仕方なく事情を説明するのだった。

「はい、どうぞ」

そう言っ手渡されたのは、私のカバンだ。

「本当にありがとうございました！」

カバンを受け取りながら、深々と頭を下げる。

事情を話すと、庭師の男性はカバンを取り出してくれた。……茂みに腕を突っ込んで。彼の傷だらけになった右腕を見ると、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「いいんだよ。女性にこんなことをさせるわけにはいかないからね」

「でも……あっ！」

細かい擦り傷の中に一つだけ大きめの傷があり、そこから血が流れている。

私は慌ててポケットからハンカチを取り出すと、彼の腕に巻きつけた。

「ありがとう、それにごめん。ハンカチ駄目にしちゃったね」

「そんな……むしろ私のせいで怪我をさせてしまって、本当に申し訳ありません」

「いいよ。ほら、まだ宿も取ってないんだろう？ 早く行った方が良い」

「でも……」

確かに今日の寝床を早めに確保しなければならぬが、ろくにお礼もしないまま立ち去るわけにはいかない。

「いいから。どうせ君が面接に受ければいつでも会えるさ」

「……わかりました。あの、お名前を教えてくださいませんか？ 私はアリーシアです」

「僕はユリウス」

「ユリウスさんですね！ 絶対に受かって恩返しをしますので、それまで待っていてください！ ニッコリと微笑んでくれたユリウスさんに向かって、小声で付け加える。

「……そのためにも、ここでのことは執事のレヴェリッジさんには絶対に言わないでくださいね」するとユリウスさんは、声を上げて笑い出した。

「ちよっ！ そんな大きな声を出したら、誰か来ちゃいます！」

「大丈夫だよ。ここに人が来ることはほとんどないからね」

「そうなんですか？」

「このあたりの植物は観賞用じゃなくて、僕が趣味で育てているんだ。といっても無断でじゃないよ、ちゃんと城の許可は取ってある」

そう言っていたずらっぽく、片目をつぶってみせる彼。

「でも心配なら、早く行った方がいいよ。ほら」

背中をトンと押され、私はその場を離れた。

少し歩いたあと後ろを振り返ってみると、ユリウスさんはまだそこにいた。そしてヒラヒラと手を振ってくれる。

私は小さく手を振り返してから、再び前を向いて歩き出した。

「良い人だったなあ……格好良いし、優しいし……」

そう呟きながら、私はこの城で働きたい理由が一つ増えたことに気付いたのだった。



その後、急いで街の大通りに戻った私は、無事にレヴェリッジさんおすすめのグート亭を見つけ、部屋を借りることができた。

お手頃だと聞いていただけであり、かなり安い。この値段ならしばらくの間は泊まっていられるだろう。

「はい、お待ちどうさま。これがこの宿の名物だよ！」

女将おかみさんがテーブルの上にドンツと置いたのは、ソーセージとポテトフライの盛り合わせ。それに香ばしい匂いのするバケットと、麦酒ビールだ。

「これって……お酒ですよね？」

何を食べようか迷って『おすすめをお願いします』と注文したのだが、まさかお酒まで出てくるとは思わなかった。

「あんた成人してんだろ？」

「え、ええ」

「なら飲まなきゃ。この街の皆はこれが大好きなのさ！ ほらほら、グイッといきな」

女将さんの押しに負けて、グラスにそっと口をつける。

「……美味しい！」

少し舐めただけが、懐かしい味がして思わず叫んでしまう。

実はお酒を飲むのは久しぶりだった。魔王城では飲めるわけがなかったし、その前の人生でも飲んでいない。ざっと百年以上は口にしていないことになる。

だけど獵師とか木こりに転生したときは、毎日浴びるように飲んでいたので。そうそう、この味だよ！

「おっ！ なかなかイケる口じゃないか！」

ぐびぐびと飲み出した私を見て、女将さんは気を良くしたみたいだ。

「あんた一人なのかい？」

「はい。仕事を探してこの街に来たんです。今日メイドの面接を受けたので、受ければ住み込みで働けるんですけど。不採用なら自分で家を探さないと駄目ですわね」

「へえ、メイドねえ……どこのお屋敷だい？」

「ケールベルグ城です」

そう言うと、女将おかみさんは感心したように頷いた。

「領主さまの……へえ、受かるといいねえ。あそこは使用人に優しいつて噂うわさだよ。あんた喋り方とかがあたしらに比べたらずっと上品だし、受かるんじゃないかい？」

上品と言われて、私は苦笑いを浮かべた。

何しろ元は貴族だ。マナーや言葉使いといったものは知っていて損はないから、できるだけ忘れないように心がけている。

とはいえ、周りから浮かないよう気を付けているつもりなのだが……

なんだか気まづくなって、私は話題を変える。

「ところで、領主さまってどんな方なんですか？」

執事と庭師には会ったが、肝心の領主さまには会っていないので、好奇心から尋ねてみた。

「穏やかで人当たりが良いという噂だがね……会ったことはないよ。お会いできるのは貴族か、使用人の中でもエライ人たちだけだろう？　だがもし見る機会があつたら、どんなお姿をしているのか話の種に教えておくれね」

私はくすくすと笑いながら頷いてみせた。

もう少し話を聞きたいなと思っただけで、女将さんは他の客に呼ばれてそちらへ行ってしまう。

女将さんと呼んだ客は家族連れのようなだ。家族旅行でこの街に来たのか、楽しそうな笑い声が店内に響き渡る。その声を聞きながら、残っていた麦酒ビールをグイッと呷あぶった。

「家族か……私もいつか……」

これまで結婚をしたことはあるけれど、子供を産んだことは一度もない。いつか神さまに許され【転生者】としての生を終えるときには、貧しくてもいいから愛する夫と子供に見取られたいものだ。

「……あ、すみません。麦酒追加で！」

しめっぽくなつた気持ちを誤魔化ごまかすために、空からになったグラスを持ち上げ元氣よく叫ぶ。すると横を通りかかった従業員が、これまた元氣よく返事してくれた。

「あいよー！」

——私が採用通知を手にしたのは、それから三日後のことである。



働き始めて約ひと月。早いもので、私はすっかり城なに馴染なじんでいた。

「アリーシア！　ぼさつとしてないで、これも早く洗え！」

「はい、ただ今」

気難しい料理長の怒鳴り声に怯むこともなく、私はいつもと変わらぬ返事をする。

私がゲットした職——スカラリーメイドは、メイドの中でも最下層に属する。仕事内容は過酷で休みが少ない上に、賃金も安い。住居として割り当てられる部屋は他のメイドたちと一緒に大部屋。そのためキラキラした貴族の世界に憧れ、あわよくば玉の輿に……と夢を見て応募した娘たちには、長く続けられない仕事だった。

……絶対にレヴェリッジさんは面接をした時点で、私の採用を決めていたと思う。

だってこの城のスカラリーメイドって、私しかないじゃないの!!

それにしても、ここまで人気がないのは異常だ。

スカラリーメイドは確かに過酷な仕事だが、厨房の残り物や形が少し崩れただけの失敗作をもらえることがある。そのため食いしん坊には魅力的な職なのだ。

なのに、一人しかないなんて……と初めこそ不思議に思ったが、その理由はすぐに判明した。

——間違いなくシェフが原因だ。

厨房の頂点に君臨するシェフ——サハル・ジア・ラシードは、ひどく気難しい男性だった。

褐色の肌に黒い髪を持ち、一目で異国出身だとわかる彼は、かなりの美丈夫だ。だが、薄い金茶色の瞳をいつも不機嫌そうに細め、眉間にしわを寄せている。

私と同じ大部屋で暮らすハウスメイドのアンバーに話を聞くと、歴代のスカラリーメイドの多くは、彼の怒鳴り声に耐えきれずに逃げ出したのだという。

しかし、私はシェフの怒鳴り声など気にならない。

だってどれほど怒鳴られようが、絶対に暴力を振るわれることはないからだ。

——使用人同士の揉め事は、ご法度。

これはこの城で働き始めた日に、レヴェリッジさんから言われた約束事の一つ。

トラブルの中には『金銭の貸し借り』『暴力』『男女関係』『賭博』なども含まれている。

そのため飛んでくるのは怒号だけ。鍋すら飛んできたことはないのだ。なんて素晴らしい!

だって魔王城では、殴られる、蹴られる、踏まれる、鞭で打たれるは当たり前。ときには真新しい傷口に塩を塗られるなんてこともあったのだから。

「……人の世にも天国ってあったのね」

うっとり微笑みながら零した本音を、近くで仕事をしていたキッチンメイドに聞かれてしまった。彼女は私を変なものを見るように見つめたあと、そそくさと立ち去る。

……DMとも思われてしまったかしら?

だが私はそれを特に気にすることもなく、焦げついた鍋を磨き始めた。

こうして汚れた食器を洗い、生ゴミを捨てる。毎日がこれの繰り返しだ。

一見簡単そうに思えるかもしれないが、そうでもない。

朝は四時に起きてオーブンに火を入れておかねばならないし、一日の終わりに行う厨房の床掃除も私の仕事なので、部屋に戻るのには深夜。そりゃ若さと体力が必要とされるわけだ。

それに加えて、料理に使うお肉の下準備を任されることもある。そう、つまり動物を……。これ

は他の女性たちは嫌がってやらない。

でも私は平気だった。

だってこれまで転生を繰り返してきた中で、獵師になったことも狩人になったこともあるのだから。今更この程度でビクつくなんて、ありえない。

そういえば、先ほど逃げて行つたキッチンメイドには、鶏の羽根を黙々と筆^ひついているところを気味悪そうに見られたこともある。

ふわふわな手触りが意外と癖^{くせ}になるのに……。もちろん心の中では『美味^{おい}しくいただきます。ありがとうございます』と手を合わせているけれど。

というわけで、並の女性には耐えられないスカラリーメイド生活を心から楽しんでる私だが、たつた不満が一つある。

鍋を洗っていた手を止めて、海綿^{スポンジ}を握り潰す。すると濁^{にご}った水がしみ出てきて、腕を伝った。そう、まったく泡立たないのだ！

私は目の前にある、鉄製の大きな缶を睨^{にら}みつけた。その缶の中には灰がたつぷりと入れられていて、これに水を入れて洗剤として使うのだ。

——このしがない灰汁^{あく}めっ！

といっても、私が長い転生生活でモコモコの泡を体験したのは、たつた二度しかない。

侯爵令嬢^{きさき}だったときと、日本という国に転生したときだ。特に日本の石鹼や洗剤は素晴らしい泡立ちだった！

石鹼と一口で言っても、液体に粉末に固形と、用途に応じてたくさん種類があつた。そして今私が欲している食器用洗剤は、油污れに強かつたのだ。

もちろん灰汁でも汚れはそれなりに落ちるのだが、油污れに弱く、完全には落ちない。

……薄汚れたため水を見て、その色と臭^{にお}いにげんなりする。

そのとき私は、雷に打たれたように閃^{ひらめ}いた。

「……これは、やるしかないでしょ！」

誰に聞かせるでもなく、一人こぶしを握って決意を口にした。と同時に、シェフの怒鳴り声が厨房^{キッチン}に響き渡る。

「アリーシア！ ぼさつとしてんじゃねえ！ 手を動かせ！ 鍋が足りねえ、早く持ってこい！」

私は慌てて薄茶色の液体に手を突っ込み、洗い物を再開したのだった。

3 運命の再会は月夜の晩に

深夜、城内の外れにある湖に浮かんでいるのは、幽霊でも死体でもない。……私だ。

水面に仰向けに浮かんだまま、月を見上げて呟^{つぶや}く。

「香りづけには何を使おうかしら？」

あの日以来、私は食器を洗うための液体石鹼を作ろうと考えていた。

この世界にも固形石鹸はすでに存在している。高級品のため市井には出回っていないが、このランドリーメイドたちも細かく砕いて洗濯に使っていると聞いていた。領主さまの服などを洗うためだろうか。厨房では使わせてもらえないのにズルい。

少しでいいから分けてくれないかと頼んでみたのだが、レヴェリッジさんが数の管理をしているらしく、無理だと断られてしまった。

だが石鹸を作るための材料が存在しているならば、私にだって作れるはずだ。

「固形石鹸なら、一度作ったことがあるのよね。あのとき使ったのは、オリーブオイルだったかしら？」

日本の女子高生だったとき、文化祭で手作り石鹸を作った。全校生徒の投票で優秀賞をもらったし、なかなかの出来だったと思う。

きつと記憶を掘り起こせば、作り方を思い出せるだろう。

とはいえ、私には自由時間などほとんどない。このように湖で水浴びできるのも二日に一度だ。

ちなみに、なぜこんなことをしているかと言うと、下級用人にはお風呂なんて贅沢なもの使えないからである。濡らした布で身体を拭くか、こうして外にある湖で水浴びをするかだ。

けれど木こりとして山奥で暮らしていたときは、お風呂はもちろん近くに湖すらなくて、あるのは足首までの深さの川だけだった。そこに寝転ぶようにして水浴びをしていたことに比べれば、天国である。

だって泳げるんだもの。

私は一度頭までもぐると、顔だけを水面から出し、平泳ぎで岸边に向かう。

あのとき香りづけに使ったのは、確かエッセンシャルオイルだったはず……ラベンダーとかの……

ラベンダーはなくても似たようなハーブなら、庭を探せば見つかるかもしれない。

庭かあ……ハーブもだけど、ユリウスさんも探さなきゃなあ……

面接の日に、多大な迷惑をかけてしまった庭師の男性。

私は働き始めてすぐに彼を探したのだが、未だに見つからないのだ。

まさか辞めたんじゃないよね？

以前、不安になってアンバーに尋ねてみたら、『そんな人は知らない』と言われた。

まあ、これだけ広い城だ。私だってレヴェリッジさんとユリウスさん、それに厨房で働いている人たちと、同室で暮らすアンバーたちしか知らないのだから、彼女が知らなくとも無理はない。ちようどいい機会だし、庭でハーブを探しながら、ユリウスさんのことも探してみよう。

ハーブの他に、オレンジの皮を細かく切ったのも試そうかな。油污れにはオレンジが効くって聞いたことがあるし。

そんなことを考えつつ、岸边に着いた私は真っ裸で湖から上がり、近くに置いていたタオルを手取る。

「オレンジの皮が欲しいなあ……」

髪の毛の水気を絞りながらそう呟いたとき、近くの茂みから誰かが噴き出す音が聞こえた。

「……誰かいるんですか？」

そう尋ねたが、誰も出てくる気配はない。人の裸をただ見ようだなんて、図々しいにもほどがある！

痺れを切らした私は、真っ裸のまま茂みへ向かってズンズン歩いていく。

「わっ……」

「マジか……何て奴だ」

茂みから観念したように出てきたのは、シェフと——なんとユリウスさんだった！

「ユリウス、さん……」

彼と妙な形で再会することになってしまい、私は困惑する。

「オレンジの皮が欲しいだなんて……君はやっぱり変わってるね」

ユリウスさんはまったく悪びれることなく、それどころか、むしろ楽しそうに私を見ている。

「そっ、それは、ちゃんと目的があつ——」

「おい！ 話し込む前に服を着ろ！」

そう言つて私たちの会話を遮つたのはシェフだ。

「……すみません。お見苦しいところをお見せしました」

指摘されてようやく自分が裸であることを思い出した私は、身体をタオルでよく拭いたあと、持ってきていた夜着を身につける。

普通の女性ならば、可愛らしい悲鳴の一つでもあげて恥じらうところだろうが、私は平気だった。

何しろ魔王城時代は真っ裸に首輪と足枷だけをつけられていたのだ。そんな生活を長くしていたのだから、もう今更という感じである。慣れとは恐ろしい……カムバック羞恥心。

私が着替えている間、覗き魔たちはこちらに背を向け、何やら話をしていた。

「サハルの言っていたタフなスカラリーメイドというのが、まさか彼女のことだとはね……でも、まあ納得かな？」

「俺としては、ユリウスとアリーシアが知り合いだったことに驚いたがな……どこで出会ったんだ？」

「庭だよ」

「庭？ ふうん……」

砕けた口調からして、仲が良いのだろう。タイプは違えどイケメン同士、目の保養である。

「すみません、お待たせしました」

着替えが終わったので声をかけると、二人はゆっくりこちらを向いた。どうやら一応気を遣ってくれていたらしい。

「……よくもまあ、あそこまで堂々としていられたものだな。お前に恥じらいというものはないのか？」

シェフが呆れたように言った。

まさか転生のことはいえないため、私は笑って誤魔化す。そしてユリウスさんに話しかけた。

「お久しぶりです、ユリウスさん……」

彼には変なところばかり見られてしまっている。このままでは奇人と思われそうだ。

「おめでどう、無事採用されたんだね」

「ありがとうございます。あのときは満足にお礼もできず、申し訳ありませんでした。お怪我は大丈夫でしたか？」

私はユリウスさんの腕を見たが、服の上からではわからなかった。

「気にしないでいいよ。あんなの怪我のうちに入らないし、面白いものを見せてもらったしね」

「面白いのですか？」

そんなことあったらどうか？ 考えてみたが、何も思い当たらない。

「なかなかないだろう？ ラズベリーの茂みに自分の全財産を隠しておく子なんて」

確かに、あれは少々無茶だったかもしれない。

でもあのときは最善の選択だと思っていたし、後悔もしていない。

「おかげでこうして面接に受かり、ユリウスさんとも知り合えたんだから、私は満足していますけどね」

もちろん彼の怪我のことを除けば、だが。

「君があそこにカバンを隠してなかったら、きつと知り合えていなかっただろうしね」

ユリウスさんは、そう言うてにつこりと微笑んでくれた。怪我をさせられたことを恨んではいないらしいとわかり、ほっとする。

ほのぼのとした空気の中、ずっと黙っていたシェフが口を開いた。

「……なるほどな、ユリウスが言っていた変わり者っていうのは、こいつのことだったのか」

やはりユリウスさんに、私は変人と思われていたようだ。シヨックだけど、仕方ないか……

「私もシェフとユリウスさんがお知り合いだったなんて驚きです。シェフも庭の花を見に行ったりするんですか？」

いつも忙しそうに料理を作っているシェフに、そんな時間があるのだろうか。

「花？」

怪訝な顔で聞き返すシェフを見て、ユリウスさんが小さく咳払いする。

「ところで、アリーシアはどこで何を？」

「私は水浴びですが、お二人は？」

上級使用人であるシェフは城内のシャワールームを使えるし、土いじりをする庭師も庭の外れにある専用のシャワーブースを使える。

その二人が、わざわざ湖に来て水浴びをするわけがないし……そこで、ハツと思いが当たる。

深夜、湖のほとりで隠れるようにしていた二人……まさか……

「デート!? 道ならぬ恋!？」

思わず口から出た言葉に、二人はすぐさま反応する。

「違うー！」

「気持ち悪いこと言わないでくれるかな？」

私を見下ろす二人の目が怖い。

「す、すみません」

しょんぼりと肩を落とす私に、シェフは呆れ顔をした。

「まったく、お前という奴は……」

「でも、こんな子だからこそ、サハルに怒鳴られても続けられるんだろうね」

ユリウスさんが良いことを言ってくれた。

そうですとも！

私はうんうんと頷く。

シェフは大きなため息を吐いたあと、苦笑する。

「まあ、実際そうなんだろうな……俺がここで働くようになってから五年経つが、二ヶ月持った者はいなかった……お前は、今日で三ヶ月目だ」

「そうなんですか？ 記録更新ですね」

もしかしたら、これまでのスカラリーメイドが続かなかったことを、シェフなりに気にしていたのかもしれない。

「私はどんなに怒鳴られても辞めませんので、心配しなくても大丈夫ですよ」

つい言ってしまうてから、余計なことだったかな？ と反省する。

いけない、いけない。ついポロツと言ってしまったわ。

口は災いの元である。これまで何度、痛い目に遭ってきたことか……

以前、昔の私のような性悪貴族のメイドとして働いていたとき、迂闊な発言をしたせいで熱い紅

茶をかけられたことがある。そのとき火傷を冷やししながら、固く誓ったのだ。もう二度と余計なこととは口走るまいと。

この平和な世界で暮らすうちに、それを忘れていたなんて……私の頭は鶏並みね。

それに加え、シェフは仕事場を離れると、険が取れて頼りになるお兄さんといった感じになるため、私は気が緩んでいたのだろう。

「……そう言ってくれるとありがたいな。ところで、オレンジの皮なんて何に使うんだ？」

シェフは感謝の言葉を口にしたあと、照れ臭さを誤魔化すように、表情を引き締めて尋ねてくる。そのとき、城の方から人の声が聞こえた。はつきりとは聞き取れないが、誰かを探しているらしい。

ユリウスさんは大きなため息を一つ吐くと、残念そうに肩を竦めた。

「もう少しアリーシアと話していたかったけど、どうやら時間切れみたいだ」

「あの声はユリウスさんを探しているんですか？」

「ああ。どうやら仕事をサボっていたのがバレってしまったみたいだね」

「サ、サボって？」

「大人しく戻ることにするよ。アリーシア、またね」

「は、はい！」

再会を約束する別れの言葉が、なんだかとても嬉しかった。

立ち去ろうとしたユリウスさんは、急に何かを思い出したように立ち止まり、シェフに向かって言う。

「そうだサハル。彼女を頼んだよ？」

レディ？ ……って、まさか私のことじゃないよね？」

レディとは高貴な女性を指す言葉であって、決して私のような使用人には使わないはずだ。……ではユリウスさんの言ったレディとは、誰のことだろう？」

「……ああ。任せろ」

シェフは低い声で返事をしただけで、私に説明をしてくれる気はなさそうだった。

ユリウスさんが茂みの中に消えると、シェフは私に向き直る。

「で？ オレンジの使用目的は？」

「実は、食器を洗うための液体石鹼を作ろうと思ひまして……オレンジの皮は、その香りづけに使うかと考えています。オレンジは油污れにも強いですし、万が一食器に香りが残ったとしても、さほど不快ではないでしょうし」

シェフは私の話を興味深そうに聞いたあと、ゆっくり頷いた。

「なるほどな。だが、どうしてまたそんなものを作ろうなど考えたんだ？」

「毎日毎日、あの薄茶色をした変な臭いの液体で食器を洗っていたら、いい加減嫌になりますよ」とするとシェフは、声を上げて笑い出した。

「お前は本当に変わっている。俺の怒声よりも、灰汁にうんざりするとはな」

お腹を抱えて楽しげに笑っているシェフを見て、私は首を傾げた。

ひとしきり笑ったあと、シェフは目じりに浮かんだ涙を指で拭いながら言う。

「わかった。お前には調達できない材料が他にもあるだろうから、協力してやる。……まずはオレンジだったな？ 皮だけでいいの？」

彼が協力してくれる理由はわからないが、このチャンス逃す手はない。私は慌てて頷いた。

「ありがとうございます！ 皮だけで十分です。できればこれから毎日、その日に使った分を全部くださいませんか？」

「構わない。他には何が必要なんだ？」

急いで材料を思い出す。石鹼を作るときに使ったものは、確か——

「精製水に無水エタノール、あと水酸化カリウムに、ココナッツオイルとオリーブオイル——」

「待って待って!!」

シェフは私の言葉を焦ったように遮った。何やら額に手を当てて困り果てた様子である。

「何だ、その呪文は……」

「え？ 用意していただきたい材料ですが」

「……俺はシェフだぞ？ ココナッツオイルとオリーブオイルはわかるが、他のはさっぱりだ」
そう言いながら首を横に振るシェフ。

この世界には、無水エタノールや水酸化カリウムはないのだろうか。でも石鹼が作られているということは、同じようなものはあるはずだ。何より私がそれらの名前をこの国の言葉で言えているのだから、きっと存在すると思う。

「薬師か、石鹼をここに卸している商人に、そのままお伝えいただけませんか？」